

第 2 8 期第 3 回

札幌市スポーツ推進審議会

会 議 録

日 時：2021年12月15日（水）午後1時開会
場 所：O R E 札 幌 ビ ル 8 階 会 議 室

１．開　　会

１．１　開会挨拶

２．議　　事

○事務局（深井企画事業課長）　続きまして、議題に入らせていただきます。

これよりの議事の進行につきましては、黒田会長によりしくお願いいたします。

○黒田会長　それでは、交代させていただきます。

まず、議題に入らせていただく前に、これまでと同様でございますが、発言の際はマイクの使用をよりしくお願いいたします。議事録作成をしておりますので、マイクで発言をしていただければと思います。

それでは、附議案件の趣旨説明と審議に入らせていただきたいと思います。

お手元の次第にありますとおり、議題としまして、事務局から、「札幌市スポーツ推進計画」に掲げた政策の進捗状況についてと、２０３０北海道札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会概要（案）について提示されております。

それではまず、議題１の「札幌市スポーツ推進計画」に掲げた施策の進捗状況について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（深井企画事業課長）　それでは、報告させていただきます。

資料１のＡ３判横の資料になります。

札幌市スポーツ推進計画に掲げました施策の令和２年度における進捗状況でございますが、ご報告、ご説明に入る前に、簡単に札幌市スポーツ推進計画の概要と、今日のご報告に至るまでの経緯について説明させていただきます。

Ａ３判資料の１枚目をご覧ください。

資料の左上の１の背景にございますとおり、平成２６年２月の旧計画の策定以降、札幌市として、平成２６年１１月には、冬季オリンピック・パラリンピックの招致を表明し、平成２８年４月には、新たにスポーツ局を設置、そして、２９年３月には、スポーツ庁が第２期スポーツ基本計画を示し、また、ちょうど今年度は国の計画の最終年度でありますことから、次期計画策定に向けた動きが本格化しているところでございます。

さらに、先月には、本日の議題の二つ目の２０３０年札幌冬季オリンピック・パラリンピックの大会概要案が示されるなど、この間、スポーツ行政の在り方や札幌市のまちづくり戦略の方向性に変化が見られてきているところでございます。

続いて、２のスポーツ推進計画についてでございます。

基本理念を「スポーツ元気都市さっぽろ～スポーツを通じて、市民が、地域が、さっぽろが元気に～」として、さらに三つの目標を定めております。

まずは、スポーツを「する」「みる」「ささえる」当事者である市民に向けた視点から、

目標１として、スポーツの力で「市民」がかがやく、続いて、スポーツを通じて、地域の課題を解決したり、まちを活性化させる視点から、目標２として、スポーツの力で「さっぽろ」をかえる、最後に、札幌の特徴でもあるウインタースポーツ、そして、２０３０年の冬季オリパラ招致の視点から、目標３として、スポーツの力で「世界」へつながるの三つを設定いたしました。

この計画の成果指標と目標数値は、資料の左下でございますが、令和２年度実績は後ほどご紹介いたします。

資料の右側、３の政策体系ということで、先ほどご紹介いたしました基本理念に基づく三つの目標、それに七つの方針、さらに１５の施策が関連づけられ、これに基づいて事業も展開されることになっております。

ページをおめくりいただいて、資料の２枚目をご覧ください。

４の１５の政策の進捗状況でございますが、主な事業を抜粋した形でご報告をさせていただきます。

まず、左側の一番上に自己評価基準がございますが、表の具体的な取組ごとに達成度を自己評価しております。これは、事業を執行する部局がその事業内容や事業目的等と照らし合わせまして、当初の事業内容を予定どおり実施し、事業目的を十分に達成できたもの、あるいは、当該年度以前に達成済みのものを「◎」の評価としております。そして、おおむね達成できたものを「○」としております。予定どおり事業を実施できず、今後に向けて検討を要するもの、当該年度時点で事業化に至っていないものは「▲」としております。最後に、外的要因、コロナウイルスにより未実施のもの、規模を大幅に縮小したものを「－」としております。

それではまず、目標１、スポーツの力で「市民」がかがやく、方針１、ライフステージや体力に応じたスポーツ活動の推進、そして、政策１の「子ども、高齢者、子育て世代、ビジネスパーソンのスポーツの参加を目指します」でございます。

子どものスポーツ参加のきっかけづくりとして、子どもたちに、スキーのリフト料金やスケート貸し靴料金を助成する取組でございますさっぽろっ子ウインタースポーツ料金助成については、子どもの冬季の運動機会の確保という目的から、令和２年度は、補正予算を組んで対象を拡大したことにより、利用件数は前年度比１．８倍の延べ２万７，３４８人となりました。

また、こちらには記載しておりませんが、同じく子どもの冬季の運動機会の確保という目的の補正予算として、学校におけるスキー学習のバス支援ということで、学校からスキー場への移動時の密を避ける目的で、バスの増便に対して支援を行いまして、小学校を中心にご利用いただいたところでございます。

次に、幅広い年代の方に取り組んでもらえる「ウオーキングさっ歩ろ」について、各区で作成しておりますウオーキングマップを引き続き配架するなど、ウオーキングの普及に努めてまいりました。こちらは、北海道新聞で２０２０年５月から１１月にかけて、「さっば

ろ10区（トーク）」というコーナーがあったのですけれども、こちらのご近所ウオークという記事で、各区のウオーキングマップ記載のコースについて、各区2回、全部で20回以上、ご紹介をさせていただきまして、ウオーキングマップ配布の部数がこれまでより大幅に増加いたしました。

コロナの影響で、各区のウオーキング推進事業の規模縮小などがございましたが、こうして、ウオーキングマップの普及が進むことで、お一人一人の個人、あるいは、ご家族とかお仲間同士でのウオーキングが根づいているものと考えております。

続きまして、施策2の「スポーツに親しむための場所や機会を充実させます」ですが、ここでは、ラグビーの普及振興事業をご紹介します。

（2）の下段のところになりますけれども、ラグビーワールドカップ2019は、札幌も会場となりまして、大変な盛り上がりを見せまして、海外から多くの観光客が訪れ、国際交流も進んだところでございますけれども、この大会のレガシーとして、札幌市では、タグラグビーの普及に取り組んでおります。

ご存じの方も多いでしょうけれども、タグラグビーは、タックルの代わりに相手のタグという帯状のベルトを取って守るもので、ぶつかることなく、安全なスポーツでございます。

指導経験のない先生向けに、出前授業とか指導動画を作成することを通じまして、令和2年度は、市内小学校の74%でタグラグビーが実施されました。あわせて、トップレベルの試合を観戦する機会を提供するために試合の誘致も検討はしておりましたが、こちらはコロナの影響で中止となっております。

続きまして、右に移って、政策3の「ウインタースポーツを振興します」です。

ウインタースポーツ少年団の活性化として体験会を予定していたところ、こちらはコロナの影響で中止となりましたが、広報誌等を通じて広報活動は継続しております。

新たな取組といたしましては、バーチャルウインタースポーツ塾として、スキージャンプ、フィギュアスケート、アルペンスキーのジュニアアスリートの目線による動画を配信しております。

続きまして、方針2の「スポーツを通じた健康増進」の施策4、「スポーツを通じて市民生活の質の向上を図ります」です。

清田区健康アップ推進事業をご紹介します。

この事業は、歩くことと食べることが健康づくりにつながることに着目いたしまして、「きよっち健康ポイント事業」として、ポイントを集めて応募することで景品がもらえるものです。

令和元年度につきましては、ウオーキングや食育のイベントに参加して、シールを集めて応募しておりましたが、令和2年度はイベントが開催できない状況であったことから、例えば、ウオーキングは1日7,000歩とか、食事は毎日野菜を取るなど、自ら目標を設定の上、自己採点し、3週間の採点結果で応募するなど、工夫をしながら実施をいたし

ました。

続きまして、方針3の「様々な形・場でのスポーツ参加の促進」の政策7、「スポーツを支える人材を育成し、活動を促進します」です。

ここでは、クリーンでフェアなスポーツの推進として、札幌市スポーツ協会から加盟する53の競技団体に対しまして、スポーツ庁が示している一般スポーツ団体向けガバナンスコード及びセルフチェックシートの説明、コンプライアンスの重要性について説明を行いました。

続きまして、3ページをご覧ください。

緑色となっております目標2の「スポーツの力で「さっぽろ」をかえる」、方針4、「スポーツを共生社会の実現」の中の施策9、「障がい者スポーツを振興します」です。

障がい者スポーツの普及振興、そして、拠点づくりについては、新型コロナウイルス感染症の影響で、いずれも事業規模を大幅に縮小しての実施となりました。また、ここに記載のない、はまなす車いすマラソンや、全国障がい者スポーツ大会への選手派遣も中止となっております。

続きまして、施策10の「スポーツを通じた国際交流、異文化理解を推進します」です。

ここで紹介されております札幌マラソンと札幌国際スキーマラソンは、いずれもコロナの影響で中止となっております、それに伴う国際交流も実施できておりません。

なお、札幌マラソン、札幌国際スキーマラソンは、いずれも代替イベントとして、スマートフォンの位置情報、GPSアプリを利用したバーチャルマラソン、バーチャルレースを開催しております、選手の参加の機会は確保したところでございます。

続きまして、方針5の「スポーツを通じた経済・地域活性化」の施策12、「札幌のスポーツ資源をいかしたスポーツの楽しみ方を提供します」です。

スポーツツーリズム振興ということで、中島公園でクロスカントリースキーとイルミネーションが同時に楽しめるナイトクロカンinホワイトイルミネーションを開催いたしました。SNSとかメディアでも紹介されまして、10日間で約2,300人の参加がありました。

続きまして、右側をご覧ください。

オレンジ色の目標3、「スポーツの力で「世界」へつながる」、方針6の「さっぽろの魅力を世界に発信」の施策13、「国際大会やスポーツイベントを通じて国内外に札幌の魅力を発信します」です。

こちらは、令和2年度実績のため、東京2020大会が延期になったことが書かれています。

最後に、施策15の「札幌ブランド、シビックプライドを醸成します」です。

さっぽろジュニアアスリート発掘・育成事業としまして、令和2年度は、冬季5種目の選手の育成を開始し、下記3種目の選定を行ったところでございます。冬季5種目のうち、4選手がナショナルチームに選出されるなど、成果が出始めているところでございます。

ページ右下の自己評価集計でございますが、予定どおり実施できたとする「◎」が24、おおむね実施できたとする「○」が45、検討を要する、事業化に至っていない「▲」が2、外的要因により未実施または規模を大幅に縮小した「－」が28となっております。

令和元年度実績との比較では、今回、令和2年度実績から外的要因（コロナ）により規模を縮小して実施したという累計が新たに登場したことに伴いまして、自己評価基準の見直しを行いました。このため、令和元年度実績を令和2年度評価基準で再集計しますと、「◎」が34、「○」が52、「▲」が7、「－」が6となります。令和元年度から2年度にかけましては、「◎」が34から24に、「○」が52から45に、「▲」が7から2にいずれも減っておりますが、外的要因（コロナ）を理由にするものが6から28と大幅に増えている状況でございます。

15の施策の概要につきましては、以上でございます。

1枚おめくりいただきまして、最後のページでございます。

ここでは、5、「成果指標と目標数値の状況」についてご報告いたします。

まず、一つ目のスポーツ実施率ですが、令和2年度は、54.9%と前年度から3.7ポイントの減少となっております。比較対象として国の数値を記載してございますが、59.9%ということで、札幌市のほうが5ポイント低い結果となっております。

国は、前年度比で6.3ポイント上昇しておりますが、その理由として、コロナによる日常生活の変化、仕事が忙しくなくなったからなどの回答が上位となっております。

また、表には示しておりませんが、国の調査結果では、20代、30代の女性の実施率が男性と比べて低くなっておりましたが、札幌市の場合は、むしろ、その世代では、男性のほうが低いとなっております。これにつきましては、原因の分析を進めてまいりたいと思います。

次に、（2）の障がいのある方のスポーツ実施率でございます。

令和2年度は、54.1%と前年度から1.5ポイント増加となっております。既に目標の50%は達成しております。比較対象として、国の数値でございますが、24.9%と非常に大きな乖離がございます。これは、札幌市の場合は、障がい者手帳を持つ方を対象として郵送調査を実施しているのに対しまして、国は、インターネット調査会社が保有するリサーチモニターを対象としたインターネット調査ということで、手法が異なっている違いによるものと考えております。

続きまして、2のウインタースポーツ実施率でございます。

令和2年度は、20.5%と前年度から1.9ポイントの増加となっております。なお、比較対象として、20歳以上の割合も掲載しておりますが、高齢者にとっては取り組みづらいところもありますので、50代以上の世代では、いずれも実施率が大きく下がりました。令和2年度は12%となっております。

しかしながら、前年度比1.9ポイント増ということで、18歳から49歳の実施率と上がり幅は同じでございますので、こちらも大幅な上昇と考えております。

次に、３、直接スポーツ観戦率でございます。

令和２年度は、２０％と前年度から２３．６ポイントの大幅な減となっております。比較対象として、国の数値は２１．１％とほぼ同水準でございます。

これまで、札幌市民には、身近に観戦できるスポーツが、プロ野球、プロサッカー、プロバスケット、マラソンなど数多くあったことから、国の平均よりも高い数値で推移をしていましたが、今回は、スポーツイベントの無観客、人数制限などが大きく影響したものであると思います。

最後の指標、４のウインタースポーツ目的の来札外国人観光客数でございます。

令和２年度は、コロナのため、調査未実施として、「－」となりました。目標値も、２５万人から９万８，０００人に変更しているところでございます。

令和２年度は、この指標の基となる外国人個人観光客動態調査が未実施で「－」となりまして、札幌市全体の計画であるまちづくり戦略ビジョンでの観光客数の目標値も下方修正されたことから、それに合わせて９万８，０００人となったものでございます。

最後に、一番下の６の事業実施結果及び成果指標に係る分析・要因についてでございますが、これまでのまとめとなっておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

説明は以上でございますが、本日、委員の皆様には、報告内容に関するご意見のほか、我々としたしましても大きな課題として取り組んでまいりましたコロナ禍におけるスポーツ活動につきまして、それぞれの専門的なお立場からのご発言をいただきまして、我々の今後の事業の参考にさせていただければと考えてございます。どうぞよろしくお願いいたします。

以上でございます。

○黒田会長 ありがとうございます。

では、ただいまの事務局からの報告について、ご意見やご質問などがありますでしょうか。

○阿部委員 意見ではないのですが、追加で補足説明をさせていただきたいと思います。

３ページの方針７の施策１５番目のさっぽろジュニアアスリート発掘・育成事業についてです。冬季５種目、夏季３種目を今年から強化して、冬季については昨年度から強化しているのですが、その１期生の選手たちが、今年行われた世界選手権に１名、代表で選ばれて、今年から女子の複合が正式種目に取り入れられて、その代表になりました。

この選手は、先週に行われたノルウェーのワールドカップで３位の表彰台に上がりまして、２０２６年のオリンピックで、正式種目に採用されたときには、オリンピックの代表になる可能性も十分ありますし、メダル候補にもなるのではないかと思います。

夏季種目の陸上でも、今年の全国大会で、４００メートルで２位に入った選手が出てき

ており、これから先も非常に期待できる選手が指定選手に選ばれています。

また、強化指定選手は、中学・高校生なのですけれども、そこに送り込む発掘事業も12月4日に開催しています。これは、1年生から4年生までの札幌市内の子どもたち、定員300名として体力測定を行って、有望な子どもたちに8種目をいろいろ経験させて、その少年団のほうに送り込むという事業をしたのですが、300名の定員に1,700名の子どもたちが応募をしてくれました。実際に300人を測定して、昨日も選考委員で、取りあえず、そこから40名ぐらいの運動神経がよかった子を選んで、そこから、2次審査ということで、もう一度、体力測定をして、最終的には15人ぐらいに8種目をいろいろ経験させて、得意というか、向いているスポーツに送り込んでいこうということです。

これを毎年行っているのですが、札幌市から世界に通用する選手を強化しているということを補足で説明させていただきます。

○黒田会長 ありがとうございます。

さらに補足ですけれども、テニスも、全国ベスト4を小学校6年生の選手が実績を残しました。

目標が三つありまして、一つ目は、スポーツの力で「市民」がかがやくとなっています。これは、主に札幌市民の健康に関してとか、運動の実施率に関してとか、もろもろあると思うのですけれども、そういったところからの意見だったり、目標の二つ目であれば、スポーツを通じた共生社会の実現ということで、障がい者スポーツの拠点づくり等々もあります。今、阿部委員から、目標3のスポーツの力で「世界」へつながるというところで意見をいただいておりますが、こういったカテゴリーでご意見、ご要望がありましたら発言していただきたいと思います。

○後藤委員 私、この会は初めての参加なので、その前の流れについて分からないため、間違ったこともあるかもしれませんが、資料の3枚目の成果指標と目標数値の状況についてのスポーツ実施率とあります。この統計というのは、どういった方法で取られているのでしょうか。

○事務局（多田企画担当係長） お答えいたします。企画担当係長の多田と申します。よろしく願いいたします。

ご質問の件につきましては、国の調査自体はインターネットでやっているものですが、札幌市の調査は、皆さんに紙を郵送して、送り返していただいたものを集計するという手法になっております。先ほどの障がい者スポーツ実施率でもそのような手法の違いがありましたが、同じような違いがスポーツ実施率のほうにもございます。

○後藤委員 これは全部、私の推測なのですが、例えば、障がいのある方の実施率が高いというのは、恐らく、障がいのある方は、それなりに健康に気を使っていたりするのではないかと思います。コロナ禍においても、前年と比べて低下することなく、実施率があるのかなと感じました。また、左の（1）の20歳以上は、確かに58.6%から54.9%ということでポイントが下がっていますが、これは、本当にコロナ禍の影響なのかという

ことは分かりません。

これも推測なのですが、私の外来にかかっている方を見ていると、コロナ禍で全く運動していない方が結構いらっしゃるのです。そうすると、下がり方がちょっと少ないのかなと思います。

そう思うと、実際にスポーツに関心のある方は、恐らく、アンケートに答えて、私はやっていますよとなってくると思うのです。無関心の方は、恐らく、アンケートを捨てるか、回答しないかだと思います。ウオーキングのキャンペーンをしても、リピートされる方はどんどんやっていると思うのですが、全く無関心の方は、私は知らない、やらないということになるので、そういう方をいかに底上げするかということが実施率の向上につながっていくと思います。

がん検診についても、毎年受けられる方、やはり、病気に対して関心がある方は毎年受けますが、全く関心がなかったり、ずっと受けない方もいらっしゃいますので、どう底上げをするかということを考えていただくといいのかなと思いました。

○黒田会長 目標1のスポーツの力で「市民」がかがやくというところでは、スポーツ実施率ももちろんそうですが、札幌は医療費が高いと言われていまして、そういったものの削減につながるのかどうか、直接的なつながりは見にくい状況になっていますので、先ほどのお話にあったように、調査方法をもう少し精査したほうがよさそうですか。

○後藤委員 やはり、リピートでやっている人は、そのままスポーツをどんどん続けていただいていると思うのですが、今まで全くこういうことに関係のない方をいかに拾って、その方をスポーツにどう巻き込んでいくか、そういうことが大事なのかなと思うのです。調査方法については、詳しいことは分かりませんのでお任せしますが、検討していただければと思います。

○川口委員 今お話しされたように、基本的にリピートされている方は、常にアンテナを張って、参加していると思うのですけれども、私たちスポーツ推進委員としては、自分たちの事業をする中で、やはり、一番身近に地域と密着している部分では、町内を含めて、私たちも、藻岩山というものがあるので、そこを生かすという部分で今までずっとやっています、いつもなら200名という形でやっていたのですが、今回は、20名、20名の計40名で、前半、後半ということで、その部分で、町内会を含めて、地域密着型で少しでも参加できるような行事を皆さんに呼びかけるかという部分と、参加を促進するという部分と、あとは、連町の婦人部も含めて、地域の人たちに、ウオーキングはこことこでやりますよとか、地域の人たちに参加してもらうことで底上げになると思うのです。

ただ1回限りであっても、去年、今年が楽しかったからまた来年もできるということは、やはり少ないですが、こういう部分が楽しかったとか、みんなと一緒に歩いてよかったとか、では、やってみようかという一歩にはなると思うので、やはり、そこを地域密着型でやっていきたいと思っています。

○阿部委員 新規の開拓についてですけれども、目標2の施策12のところにある昨年に

行ったナイトクロカンというものがあります。これをやってみて、今まで歩くスキーをやったことがない人がたくさん来てくれたのです。きっかけはそれぞれで、インスタ映えするとか、そういうことで来た人もたくさんいるのですけれども、そういう人が歩くスキーを体験してくれて、意外といい運動になるのだねとか、そういうきっかけづくりにはナイトクロカンは非常によかったと思っています。

この事業は今年度も継続してやっていくということですが、こういう新しいイベントをどんどんやっていると、今まで運動をしなかった人が運動をするようになるのではないかと考えています。

あとは、ナイトクロカンは、ライトアップするのにお金が結構かかるのですけれども、今年の予算でライトを購入して、来年以降は、経費をあまりかけないで自走できるような形で今後も継続していきたいと考えています。この事業は、新規にスポーツをやる人を見つけるきっかけになるのではないかと思います。

○川島委員 今、実施率のお話がありましたので、まず、事務局に一つ聞きたかったのですが、ウインタースポーツの実施率がかなり向上したということですが、主にどんな種目で増えたということはお分かりになっていますか。

○事務局（多田企画担当係長） 種目別で見ますと、ウインタースポーツでいいますと、スキーとスノーボードが大きく伸びております。特に、昨年の冬場はコロナ禍ではありましたが、屋外のスポーツアクティビティーであるところですか、市民にとって身近に市内のスキー場がございますので、そういった意味で、改めて、コロナ禍でも楽しめる屋外スポーツということで、スキー、スノーボードが再評価されて、皆さんが取り組まれたのかなと分析しております。

○川島委員 分かりました。ありがとうございます。

先ほど、阿部委員からお話があったナイトクロカンの補足になりますが、今シーズンは、ちょっとしたスケートができるスペースも簡易的につくるといいますので、さらにいろいろな方に参加していただけたと思っています。

あとは、ウインタースポーツではないのですけれども、資料のご説明の中で、目標1の方針2、スポーツを通じた健康増進のところで、区の出組として、清田区役所ですが、ポツの二つ目に、健康増進フロアで運動指導員による運動教室を実施というものがあります。これは、私どもの協会から職員を派遣して取り組んでいる事業ですが、結構人気がありますので、こういうものをほかの区でももう少し拡大していく取組があれば、運動していない方々も参加する機会が増えるのではないかと考えております。

○黒田会長 ほかにいかがでしょうか。

今、目標1のところでお話が出ていますが、私からも申し上げます。

実施率を上げるには、イベントを一つ一つやっていくことも重要だと思うのですけれども、きっかけにすぎなくて、イベントと事業はやはり違う部分があると思うのです。事業というのは、継続的に何かをしていって、その人に対してサポートしていくという部分だ

と思うのですけれども、そう考えたときに、もちろん、きっかけにはなるのだけれども、継続して参加させられるようにするにはどうしたらいいかと考えると、本人のモチベーションはかなり大きいと思うのです。ですから、そこら辺をどうくすぐってあげるかというのは、すごく難しいと思っています。

僕は大学の教員をやっているのですけれども、この前、開成中等学校に体験授業をしに行ったのです。その授業の中で、運動は健康にいいのだよというお話をしたのですけれども、では、明日から運動したいと思う人は手を挙げてといたら、しーんとなったのです。要するに、運動したら健康につながるというのは自明なのにもかかわらず、やらないというのは、そもそも健康というものの自体が僕らのフォーマットなわけです。特に、若い子であれば、病気に対してそこまで畏怖することもないですからね。そう考えたときに、それでもやったほうがいいのだよと言えるようなというか、後押しできるような事業があったりすると、さっき後藤委員がおっしゃったような実施率を上げる一つのポイントにもなると思いますし、それが継続しないと、意味がないと思うのです。

後藤委員、運動を継続してやることによって健康にいいですね。

○後藤委員 そのとおりだと思います。やはり、高血圧や糖尿病などの運動指導も、皆さんご存じのとおり、週3回、30分間、40分間以上やりましょうというのを継続することが大事だと思います。

○黒田会長 もう一つ、余談かもしれませんが、今年度に出た学術論文で、座位時間が死亡リスクを高めるという論文があります。それは何となく皆さんもイメージがつくと思うのですけれども、運動していようと、していなかろうが、座位時間が長いほうが死亡リスクが高くなり、座位をしている時間が運動の効果で打ち消せないという論文が出ています。

今、スタンディングデスクが結構はやってしまして、僕も今は取り入れているのですけれども、いかに立たせて、取りあえず歩かせるかぐらいの、阿部委員が言うように、スポーツを見せて観客を動員してというところは非常に大きな意義があると感じています。

目標1、2、3について、これは結構欲張っている気がしなくもないのですけれども、そこら辺を盛り上げていくためにも、皆さんのいろいろなご意見をいただけたらと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

○堀田委員 コロナ禍で家に閉じこもったり運動をしていた方がしなくなったという話はよく聞きますが、逆に、夜にウォーキングするとか、不慣れな方が外で運動をしだすと、腰を痛めたり膝を痛めたりですぐにやめてしまう、そういうことを一部聞いてなるほどと思ったのは、スポーツ屋さんに行って、まず靴を選ぶところが大事だとか、ウォーキングマップが市から出されているのですが、札幌市をどのように歩くか、とても勉強になるというか、ちょうどよく自分の距離に合わせて歩ける地図なのですが、まず、歩く前の準備のアドバイス等ですね。先ほどの体育館で教えているというのはとてもいいことだと思うのですが、基本の基礎を知っていただくことも課題なのかと感じました。

○黒田会長 ウォーキングというのは、正しいウォーキングの方法があるのですね。それ

はみんな知っているのですか。そこら辺も盛り込めるといいかもしれないですね。

○後藤委員 ウォーキングマップについては、私も各地区のウォーキングマップを見たのですが、カラーで、写真を入れて、歩きたくなるようなマップを作っていられっやいます。ただ、先ほど堀田委員が言いましたように、靴をどうするかとか、歩き方をどうするかとか、準備体操をどうするかとか、そういったことに触れているマップもあれば、そうではないものがあります。それから、何キロメートルとか何分歩いたら何カロリーを消費するというのが示されているものがありますが、書かれていないものもあります。

ですから、そういうところを各区で統一して、必ず、歩く前にはこういったことをしよう、靴はこういったものを選ぼう、準備体操、ストレッチをどうしようということを入れた上でマップ作りを取り込むと、多少の改善策になるのではないかと思います。

○明石副会長 札幌市の体育振興会は、110の体育振興会があるのですが、そのうちの100ぐらいが連絡協議会に入っています。そのところを見ますと、各区自体が、スポーツ推進員も関わりながら区が動いてくれる行事、清田さんの例のように、私は手稲区に住んでいますが、手稲山を使ってウォーキングと軽い登山を兼ねたものを毎年していますが、コロナのためにこの2年間はできていないのです。

そうすると、すごく待ち遠しいという手稲区民の声があるのですが、毎年参加する方がすごく定着しているのです。その方が少しずつ誘って増えていくということと、連絡協議会でスポーツの大会をしております、普通は使えないような円山のコートでテニスをするとか、地元の学校で開放している普通のテニスコートよりもやはり円山のコートでしたいとか、平岸の高台のコートでしたいとか、意外といろいろな気持ちがあるのです。そして、札幌の施設ですので、抽選とかがあって取るのも大変なのです。

北ガスアリーナ、中央体育館が新しくなりましたね。札幌市に110ある体育振興会連絡協議会の卓球部の大会がありまして、500人ぐらい来るのですが、その人たちは、北ガスアリーナでしたいと言うのです。中央体育館ですずっとやっていたのですが、今はなかなか取れないため、今、働きかけて、もしかしたら、令和4年の2月にお願いできるかなという状態で、みんな心待ちにしているのですが、その意欲、その場所で大会をしたい、スポーツをしている人もそういう気持ちがすごくあるということをお知らせしておきたいと思います。

○浅香委員 私は、障がい者スポーツ関係の団体ですが、障がいのある者が何かスポーツをしたいといった場合は、その障がいによって競技が合う、合わないがありますから、いろいろ相談に乗ってあげまして、何かさせてあげるまで放さないでおくのですね。

先ほど、阿部委員がおっしゃっていたジュニアアスリートの関係ですが、1,700人の応募があって、最終的に40名の方を選出したという話をお聞きしました。残りの1,660人の方々に対しまして、冬季の競技が5競技、夏季が3競技を対象にされたということでしょうけれども、残念ながら漏れた方々に対しまして、もっとこういう競技が合うよというようなアドバイスとか、その後のサポートをされたのでしょうか。

というのは、その場で切ってしまうと、スポーツ嫌いな子になってしまうことを心配しています。

○阿部委員 まず、今回、第1回目の体力測定会ということで、300人を募集して、最初は、定員にならないのではないかとあって、あちこちに一生懸命声をかけたのです。そして、いざ応募が始まってみたら1,700人ということで、本当に厳選な抽選で300人にしたのです。

その時点で1,400人が落ちてしまったのですが、そっちのほうは、今のところ、全くフォローできていない状況です。ただ、300人が受かったのですが、実際は270人が体力測定をやってくれて、その中で、運動神経のいい40人を今フォローしています。その全員に対して、測定が終わった後に、すぐにフォローアップをしているのです。データがAIで出てきて、あなたの運動能力のここが弱い、ここを強くするにはこういう運動をもっとやったほうがいいのか、瞬発力のない子にはもっとこういうスポーツをやったほうがいいのか、すぐにフィードバックして、あなたにはこういうスポーツが向いていますと。それは270人全員にやっているのです、その測定の効果自体はすごくよかったと思っています。

○浅香委員 一言言うと、残りの1,400人の方の2回目、3回目ができると、よりいいのかなと感じています。よろしくお願いします。

○阿部委員 今回、需要がすごくあることが分かったので、来年度以降も何回か開催する予定です。ただ、お金が結構かかるので、よろしくお願いします。

○黒田会長 浅香委員、目標2のスポーツを通じた共生社会の実現というところでいろいろ施策をやっていますけれども、そちらに関してご意見等はございますか。

○浅香委員 障がい者スポーツ指導員の養成のことが載っていますけれども、行政が主管するものに関しては、今回はできなかったのかなと思いますが、私どもの団体とか、北海道の障がい者スポーツ指導者協議会という団体もありまして、そこでは、コロナ禍なものですから、人数を10名ずつに絞ったり限定して開催しております。

障がい者スポーツも、夏のほうは何とか徐々に競技人口が増えてきているのですが、冬関係はなかなか育たないです。札幌とか北海道の人は、雪を見ると全てバリアだと思って、楽しむという感覚がほとんどない状況なものですから、その中において、冬の競技をいかに楽しくやらせてあげて競技力向上を図っていくかが大事になります。

先ほど阿部委員から紹介いただきましたけれども、障がい者スポーツの中でも、これから2030の冬季オリパラを目指すということで、小学生、中学生のレベルの障がいのある人を、ウィンタースポーツに限らず、いろいろなスポーツの楽しさから競技スポーツに行ける子を育てていくというのが私の役割かと思っています。

○黒田会長 現場から何か意見はあったりしますか。場所が少ないとか、環境がよくないとか、そういうことはないですか。

○浅香委員 2000年のシドニーパラリンピックから、パララグビーとか、競技種目が

圧倒的に増えたのです。２０００年以前は、団体競技ですと、夏だったら車椅子バスケットボールとか、冬だったらパラアイスホッケーとカーリングぐらいしかないような時代だったのです。やはり、この２０年で競技種目が圧倒的に増えたものですから、今困っているのは、圧倒的に練習する場所がないということはどの競技をしている方もおっしゃっています。

○黒田会長 単純に競技人口が増えたからということですか。

○浅香委員 人口と競技種目が増えたということです。

○黒田会長 それぞれに合った競技施設が少ないということですね。

○川島委員 ちょっと戻りますけれども、先ほどの習慣化というところで、現状をお話すると、管理させていただいている体育館とかプールとかのスポーツ施設は、子どもたちとか一般の方々はある程度戻ってきているのですが、やはり、ご高齢の方の戻りが非常に悪い状況です。

というのは、ご本人がまだご心配されているのか、家族の方が止められているのか、その辺は分かりませんが、これが先ほど言った習慣化という意味で一時的に止まっているのであればいいですが、この方々が運動をしなくなると、かなりいろいろなところに影響が出てくるなど非常に危惧しています。

我々としては、屋内の施設も安全に使えるというところをＰＲしながら、少しでも戻ってきていただきたいと考えています。

もう１点、運動とかスポーツの習慣化という意味で、子どもたちが小さいうちからスポーツに慣れ親しんでいただくことが必要だと思っていますし、もっと言うと、幼少年期から運動してもらおうとか、遊びを通じた体力づくりをしてもらおうというところから習慣化が始まってくると考えています。

今、どうしても子どもという一くくりになっていますが、もっと下の世代からスポーツとか運動を広げていくような取組というか考え方を持っていたほうがいいと感じています。

○岩崎委員 今、川島委員からお話があったと思うのですが、コロナ禍になってからももう少しで２年がたとうとしていると思うのですが、プロスポーツクラブの運営、経営からの視点の意見にはなってしまうのかもしれませんが、皆さんご存じのとおり、我々Ｊリーグの試合も、コロナ禍の中で５，０００人制限で活動してきました。それが１万人制限になって、今、やっと５０％制限になって、さらに、今、ワクチン検査パッケージをするともう少し増えるよという段階まで行くことができました。

来場者の皆様には、様々な制限やお願いをして試合を運営しているのですが、やはり、今、我々が懸念していることは、今まで試合を見に来ていたサポーターの皆様、お客様の皆様が、コロナが明けたときに本当に戻ってくるのか、ここがクラブとしてすごく考えなければいけないポイントだと思っています。

川島委員から、施設が開くようになって、今まで来ていた人たちがすぐに来るような

状況ではないというお話を聞いたときに、うちの試合もそうだなと感じています。このコロナがどうなるか、まだまだ分からないですけれども、心配をしている方というのは現実的にかなりいるなというのは、我々も肌感覚としては感じております。

話は変わりますが、プロスポーツクラブというのは、やはり新規ファンの獲得というのが永遠のテーマで、我々クラブとしても様々な施策を実行しているところです。その中で、クラブの主軸の一つとしては、北海道コンサドーレ札幌を北海道の人たちにどれだけ知ってもらえるかです。試合に来る、来ないは別にして、まずはどれだけ知ってもらえるかということを大きなポイントとして、いろいろチャレンジしています。

サッカー、コンサドーレに興味がなくても、例えば、テレビを通してコンサドーレが目に入るとか、新聞の記事の一つとしてコンサドーレを知ってもらうということがまず第一歩かと思っていまして、様々なメディアに対してとか、SNSを通して、みんなに知ってもらうためにいろいろな施策をしております。

私は、札幌市スポーツ推進計画は、かなりすばらしい計画だなと個人的に思っています。こういうすばらしい計画をいろいろと実施しているからこそ、札幌市の皆さんにもっと知ってもらうということが大事ではないかと思えます。

この表をみんなに出しても、難しくて読まないと思うのですが、例えば、テレビ番組の中で何かの事業を取り上げてもらうとか、さっきのウオーキングマップもすばらしい事業だと思うのですが、これを札幌市の人たちはどれだけ知っているのかというと、はてなマークになってしまいます。そういったものをうまくPRして、いろいろな人に知ってもらうという施策に、もっとチャレンジしていったほうがいいのではないかと感じました。

また、事務局に質問ですけれども、コロナ禍になって、我々もいろいろな事業をもう一度見直しをしたりして、いろいろ施策を変更してきました。

現状、今日、深井課長からご説明があった中で、外的要因により未実施のものが28項目あると思うのですが、コロナ禍で施策方法を見直すとか、そういったプランというか、予定はあるのでしょうか。それとも、今後もこのままいくという方向性でしょうか。

○事務局（深井企画事業課長） この推進計画につきましては、現在、国のほうで第3期のスポーツ基本計画が今年度中に策定される見込みです。それを受けまして、札幌市でも、来年度中、これをまた見直しをする作業がございます。その見直しをする方向性については、コロナの状況をどう盛り込んでいくかということまで至っていないのですが、いずれにいたしましても、来年度はこれを見直しするということになると、恐らく、そういう議論も一部出てくるのではないかと考えております。

○岩崎委員 コロナの中で難しいジャッジになると思うのですが、引き続き、よろしくお願いします。

○黒田会長 ちなみに、札幌市のほうで、この推進計画に関して何かアピールをしているということはあるのでしょうか。これが人の目に見えるところにあるかないかとかでしょ

うか。

○事務局（多田企画担当係長） 札幌市のホームページに載せたり、スポーツ局の庁舎もそうですが、市の施設で手に取って見てもらえるような形で置いていたりしています。先ほど岩崎委員がおっしゃったように、メディアを使った露出というところまでは至っていない状況です。

○黒田会長 岩崎委員のお話ですと、札幌市がこれだけ頑張っているのだよみたいに、もう少し訴えてもいいのかもしれないですね。

ほかにいかがでしょうか。

○中山委員 札幌市中学校体育連盟の会長をしております。そして、八条中学校の校長をしております。

大会運営が大きな仕事の一つになるのですが、令和2年度については、コロナの影響で夏の大会が全くできず、秋の新人戦から再開し、3年度については、何とか大会を実行したのですが、その都度、大きな心配をされて、大丈夫なのか、こんなときに中学生に大会をさせるというあなたは大丈夫かというお話をいただくような状況での1年、2年だったものですから、体力向上ということで、一般的な大会に出てくるような運動部活動を好んでやっている子以外にまで浸透させて、いろいろなことをさせていくというところに大きな課題があったと思っています。

大会をやること、頑張っている子どもたちを何とかさせてあげたいとか、どういう配慮、安全策の下でやればいいのかという意味では、非常に充実した活動ができたと思っていますところですが、やらなくていいよ、危ないから何もさせてはいけないという流れもあったものですから、例えば、遠足は、小学生はほとんどやらなかったとか、運動会についても、種目を制限したり、全道・全国大会を目指すような子どもたちの勝ち抜き戦の部分はやったけれども、頑張ってきた思い出づくりにつながるような試合経験を積ませるための2軍、3軍の出番を確保することは全くできずにきてしまっているところがあります。

体力測定等につきましても、無理をしなくていいよということで、中学校も非常に停滞した1年間だったものですから、今、その挽回に向けて、各学校が一生懸命に取り上げてやってくれているところです。

私たちの学校でも、1年生が久しぶりに体育館を広く使ったの運命走をしていました。皆さんは運命走をご存じでしょうか。体力のある子が勝ちなのではなくて、運がついてくるという、昔のパン食い競争とか、くじを引いてやるとか、借り物競争とか、障害物競走とか、そういう要素も含めた楽しい運動ということで取り組んでいる学校が多いと思います。私どもの学校もそういうことをやっています。

また、部活動においても、アスリートを目指したり大会を目指すのではなくて、運動習慣をキープするために、朝に15分間だけ運動するような部活動を入れたり、文化系の部活動と並行して入部を認めるような、ちょっと運動とか、そういったことも含めて、いろいろな大事さがあるということを中学校レベルでも推し進めているところです。

地域のホットヨガの先生が来てくれるような部活動を展開している中学校もあるという情報もありますから、これから運動の部活動を地域にという一つの方向として、アスリートを育てるという方向ともう一つ、生涯スポーツの視点から、いろいろなことができるチャンスがあって面白いなということを味わわせるようなスポーツも、現在、中学校においても進んでいます。

今、市の施策と併せて、中学校でもこんな楽しいことができるということをアピールすることができたらいいかなという思いで聞いていたところでした。

あわせて、東京2020がありましたので、中学生の間で、スケートボードへの興味関心が非常に高まっております。ところが、集まってやると叱られて、ここは駄目だと言われます。

実は、札幌駅前に集まった子どもたちが、今、行動ぶりが目に余るという指摘を受けるとともに、あの子たちのやる場所を何とか見つけてあげたいよねという声が上がってくるなど、一部、アピアのドームのところに集まって、よからぬ動きを見せている子どもたちがいたりということもあるのですが、興味関心が持てるという意味では、裾野を広げていく一つになるのではないかなということで、生徒指導面と併せて、中学校のほうでも興味を持っているところもあるというような、ああいったものについても、場所の提供とか、安全にできる場所があるといいかなと思います。

月寒公園でも、管理ができる、できないというところもあるものですから、ワンちゃんを連れて散歩されている方や、小さい子どもを遊ばせている親御さんから見た場合に、中学生、高校生の行動ぶりはちょっと心配だという部分もありながらも、そういった裾野が広がっていった、競技を目指す選手につながっていくのではないかなという要素もあるということもお伝えできればなと思ったところです。

まとまりがないですが、情報提供ということでお願いいたします。

○黒田会長 スケボーに関しては、事務局の資料にスケボーパーク改修というのがありますが、これは東区でしたか。

○事務局（多田企画担当係長） お手元の資料でいいますと、2ページ目の左下です。

官民連携によるスポーツ環境整備手法の研究というところで、ウインタースポーツ・オフシーズン練習施設整備費補助金という事業になっています。その名のとおり、あくまでもウインタースポーツのオフシーズン、夏場の練習施設という趣旨ですので、スノーボードの練習施設ということで、結果として、それがスケボーパークだったというものではございますが、2020年度に関しましては、東区にあるこちらの施設でそういった改修を行いまして、新しい施設で、子どもたちとか中高生などが取り組んでいるという状況でございます。

○黒田会長 今、中山委員がお話しされていたような中学生でも普通に使えるということでもいいですね。

○事務局（多田企画担当係長） そうです。当然、我々も現地を確認しておりますが、こ

こは入門者が行くような施設ということでしたので、若い子たちが比較的多く集まっているような状況です。

○黒田会長　そういう施設があるということで、ぜひ告知いただけると幸いです。

私から最後に、笹川スポーツ財団から、今回、12月3日に、スポーツ基本計画の策定に向けてということで、第3期に向けてこうしたほうがいいというポイントが出ています。笹川スポーツ財団の熊谷さんというフェローの方が、評価の方法をもう少し変えなければいけないね、しっかりエビデンスに基づいて何かが動くような感じにしたいねという話をして、分析されています。事務局の方々も、もしご覧になっていなければ見ていただきたいと思いますし、僕も見てみて、確かにそうだよなと感じましたので、参考にさせていただければ幸いです。

○事務局（深井企画事業課長）　たくさんのご意見をいただきまして、ありがとうございます。

今日は、底上げということで多くのご意見を頂戴したと思います。まさしく、そのとおりだと思いますので、今後、市としても、こういった形で底上げを図っていけるかということも引き続き検討していまいたいと思います。

○黒田会長　それでは、次に移りたいと思います。

2030年北海道・札幌オリンピック・パラリンピック冬季競技大会概要（案）ということで、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（須志田計画担当課長）　それでは、招致推進部計画担当課長須志田から説明いたします。

お手元の資料のA3判横の紙が2枚と冊子となっているものが1部あると思いますが、お時間の都合から、概要版を中心にご説明していまいたいと思います。

今、先生方のご議論を聞いていて、改めて、スポーツの力で「市民」がかがやく、「さっぽろ」を変える、そして「世界」へつながる、このテーマがまさにオリンピック・パラリンピックの開催概要計画と非常に親和性があると思いながらご議論を聞いていました。

そして、ご承知のとおり、こちらの招致に至る過程において、やはり、市民の皆様のご理解が本当に重要な局面になっています。ですから、私にご説明した後に忌憚のないご意見をいろいろいただきたいのと同時に、皆様の周りの方々にも、この概要の内容をお伝えいただくとか、応援いただくようなことをいただければ幸いです。

それでは、説明をしてまいります。

A3判横の紙でございます。

まず、大会概要（案）、オリンピック・パラリンピックを通じたまちづくりの考え方について説明していまいります。

ご承知のとおり、1970年にオリンピック開催されました。今から50年前でございます。地下鉄の南北線や地下街、そして、道路網といった都市基盤の整備が促進されたのに併せて、札幌の雪まつりの様子が大会の映像とともに世界中に紹介されまして、国内外

から多くの観光客が訪れるようになり、札幌が国際観光都市の地位を確立するに至った大きなきっかけになったということです。オリンピックの開催をきっかけに国内有数の都市に成長してきたところでございます。

一方、それから５０年余りが経過した現在でございますが、成熟した都市となった札幌市において、解決すべき課題、人口減少、少子高齢化という社会構造の変化への対応であったり、１９７０年前後に急速に整備されたインフラの老朽化が進んでいますので、これを更新していかなければいけない、そして、共生社会の実現、世界的な問題である気候変動対策など、成熟した社会において解決すべき課題が非常に多く、私たちは多様な形で直面しています。

右のほうに進んでいただきたいと思います。

そういう中で、オリンピック・パラリンピックという人々の力を結集する絶好の機会を生かしまして、この課題の解決に向けた多くの取組を推進することにより、１００年後も輝き続ける持続可能なまちを構築するための礎にと書いてございます。

ここで、なぜ１００年後と書いたかを少しご説明いたしますと、ご承知かもしれませんが、来年、札幌市は市制施行１００周年を迎えます。そして、２０３０年という大会が決まれば、新しい１００年のスタートのちょうど１０年間に該当します。オリンピックの２０３０年に向けて、市民の皆さん、企業の皆さん、行政という関係する人が一つの目標に向かって様々な取組を進めることによって、様々な課題解決に近づくことができるのではないかと考えています。

そして、２０３０年はＳＤＧｓの目標達成年でございます。そういった札幌市の様々な取組が大会に至るまでの様々な取組を通じて、その先を展望するような札幌のまちづくりをしていきたいと考えております。

大会がもたらすまちの未来ということで、中段に目を移していただければと思います。

大会ビジョンは、「札幌市らしい持続可能なオリンピック・パラリンピック～人と地球と未来にやさしい大会で新たなレガシーを～」でございますが、持続可能なまちづくりを進めるための絶好の機会であるオリンピック・パラリンピックを最大限に生かすため、目指すべき方向性、ビジョンを構築いたしました。

そして、２０１９年に実施したワークショップにおいて、オリンピック・パラリンピックに対して、市民の皆さんから、健康増進や経済の活性化、そして、バリアフリーの促進を通じた暮らしやすい社会の実現など、そういった多くの期待を寄せられたということと、下のほうに目を移していただきたいのですが、喫緊の世界的な課題であり、最近、ＩＯＣも非常に注目している気候変動対策、この四つを柱として開催概要（案）をつくっております。

そこで抜き出した四つのテーマ、スポーツ・健康、経済・まちづくり、社会、環境、この四つの分野を設定しまして、目指すべきまちの姿と、その大会によってもたらされるレガシーを明確化しました。

その明確化したものは、下の四つの箱に書いております。

こちらの詳細につきましては、開催概要（案）冊子の7ページから順に書いてございます。時間の都合がありますので、かいつまんで説明してまいりますと、スポーツ・健康の分野では、先生方ご承知のとおり、札幌市は健康寿命が全国平均よりも低いという課題があります。

そういった中で、目指すべきまちの姿としては、先ほど来、議論いただいているスポーツによる健康で活力のある社会を目指すといった中で、さらに大会のレガシーとして、先ほど阿部委員からもご紹介がありましたが、ジュニア選手の発掘や育成ですね。やはり、オリンピックという目標があれば、ジュニアの子たちがすごく頑張っていて、新たに裾野も広がっていくといった思いもございます。そして、先ほど来、ご高齢の方がスポーツをする機会も非常に重要であるということでございましたが、気軽にスポーツができる環境の整備、お孫さんがやったり、おじいちゃんがやってみたり、あるいは、スキーを久しぶりに復活してみようかな、そんな市民の皆さんがいるのではないかと思います。

そして、東京大会の一つのレガシーとして考えられます多くのボランティアとともにやる大会です。東京大会は、コロナの影響があって、ボランティアの方が十分に活躍できなかったという報道もございますが、実は、登録された方は非常に多くいらっしゃいました。そして、東京大会からは、それをデータベース化して札幌につないでいきたい、そんなようなお話もいただいておりますので、それを東京大会のレガシーとして札幌で実現していきたい、そういった思いでございます。

下に目を移していただきまして、経済・まちづくりです。

札幌市の特徴でございますが、雪まつり期間以外の冬期間は観光閑散期でございます。雪まつりの期間以外、実はホテルは結構すいています。さらに、超高齢社会に適した交通体系の構築というのは、バス路線の維持がなかなか難しかったり、高齢化が進んでいきますと、オンデマンド交通などをどんどん進めていかなければいけないという特徴がございますが、そういった中で、目指すべきまちの姿としては、世界に躍進する魅力あふれるまちづくりです。そして、レガシーの例としては、札幌市の魅力、例えば、食とか美しいまち並みという雪まつり以外の期間でも、スノーリゾートシティとして実現し、それを世界に発信していきたいということです。

そして、皆様ご承知のとおり、オリンピックというのは、企業様がオリンピックの発信力や注目度にご共感いただいて、様々な技術を提供いただきます。そういった中で、一環として、選手村でシームレスで快適な移動環境を試行的に実施して、それを札幌市の中に展開していくといったこともできるのではないかと考えています。

続きまして、社会に目を移していただきまして、特徴としまして、障がいのある方のうち、地域で暮らしやすいまちと思う割合が低いというお声を頂戴しています。

これは、先ほど浅香委員からもお話がございましたが、冬の部分も影響しているのかなと思っています。それをバリアと考えずに、一つの特徴と捉えて、雪で楽しむ環境だった

りをしっかりつくっていくことも大事かと思っていますが、ターゲットとしましては、全ての人にやさしい共生社会の実現、レガシーとしては、インフラのバリアフリー化の推進であったり、当然のことながら心のバリアフリーの普及です。

また東京大会のお話をしますけれども、パラリンピックを通じて、日本国全体に、パラリンピックとか共生社会という強烈なメッセージを残せたものと思っています。ですから、その部分を我々がしっかり引き継いでいくということで、札幌市民のみならず、日本全体で、共生社会の大切さ、その実現に向けて大きくつなげていけるのではないかという思いでございます。

そして、最後の環境の部分です。

札幌市の特徴は、冬期間に暖房を使わざるを得ないということで、1人当たりのCO₂の排出量が多いという特徴がございます。

そして、目指すべきまちの姿としては、次世代が豊かな自然を享受できるまち、この地球環境問題というのは、札幌市のみ問題ではございませんが、これを自然雪で開催できる都市が、気候変動の影響もありまして、どんどん少なくなっています。そのように予測をされています。

ですから、このオリンピック・パラリンピックの発信力を通じまして、この環境は非常に希少なものであると。さらに、例えば、再生可能エネルギーの利活用の場面だったり、市民の皆様で、植樹等の自然環境保全の取組の市民参加のような活動を世界に向けて発信できるのではないかと、そういったことで、札幌市が世界に貢献できるのではないかと考えています。

雑駁になりましたが、このような4本立てで大会を通じたまちづくりということを進めていきたいと考えてございます。

おめくりいただきまして、最近、注目を集めている大会経費の部分でございます。

大会経費とは、ご承知のことと思いますけれども、大きく施設整備費と大会運営費の二つに分かれます。

施設整備費というのは総額800億円、札幌市の実質負担額としては450億円としています。こちらの内訳としては、既に使われている施設を今後とも使っていくための延命化、更新のみを実施しまして、大会のためだけの新しい施設は設けない計画です。

これは、簡単に申しますと、大会があろうがなかろうが、例えば、施設が老朽化したことによる更新であったり、補修だったり、そういったこととご認識ください。ですから、ここの部分につきましては、税金は投入されます。

右手のほうに目を移していただきまして、大会運営費、2,000から2,200億円と見積もっています。こちらについては、税金は投入されません。

IOCの負担金やスポンサー収入と民間資金を活用し、原則、税金は投入しない、そして、不測の事態への対応のため、予算の10%程度の予備費を確保ということでございまして、言い方を変えますと、大会運営費というのは、2,000から2,200億円程度

の民間資金がこの期間に札幌に集まってきます。

ですから、この部分について、しっかり札幌市の経済の活性化の部分にもつなげますし、先ほどの、いわゆるスポーツ振興の部分などにも波及させることができるということでございまして、こういった大会の運営費は一緒くたで3,000億円あったら、ほかにいろいろなことができるのではないのみたいなご指摘もいろいろいただくのですけれども、この施設整備費につきましては、もともと大会があろうがなかろうがかかるお金なのですよというお話と、大会運営費につきましては、民間の皆様からいただいたお金なのですよという部分を、しっかり仕分けをして説明していく、これが我々のこれからの大きなミッションの一つかと思っています。

そして、右手に目を移していただきまして、オリンピック・パラリンピックの日程でございます。

こちらは、あくまでも北京大会を参考に書いてございます。

オリンピックは、2030年の2月8日から17日間、7競技、109種目、パラリンピックにつきましては、約1か月後の3月8日から10日間、6競技、80種目です。

それぞれ競技会場と種目を書いてございますが、主立ったものとして、1970年のレガシー施設である大倉山ジャンプ競技場、月寒体育館、北海道立真駒内公園の屋内競技場、こちらは1972年のレガシー施設です。

そして、右のほうに目を移していただきますと、既存施設の活用、こちらは、IOCのほうも、2014年にニューノームという考え方で、既存のものの徹底した活用ということをやっております、それに準じた形で、新しい施設を造るのではなく、たとえ市外であっても、飛び地であっても、既存のものをしっかり使うのだということで、帯広のオーバルと長野市のスパイラルということで挙げてございます。

今ご説明した会場配置計画のコンセプトを左手に書いてございます。1972年大会の会場、既に市民に利用されている施設を最大限活用するということです。

ここで、私が勝手に思っているのですけれども、市民の皆さんがお子さんの頃から使っている施設で世界最高峰の競技が行われるというのは、やはり、子どもたちがすごく憧れたり、親近感を覚えたりということにつながっていくのではないかと思います。計画を立てていました。

そして、都心の近くでウィンタースポーツを楽しめる札幌の特徴を生かす、市内から20分、30分で競技会場やスキー場がある、これは世界でも本当に稀有な環境ですので、これを我々もしっかり生かしていきたいということです。そして、選手の皆さんの輸送の部分だったり、それが札幌市の強みかなと思っています。

そして、樹木の伐採等、競技に必要な最小限の範囲に収めまして、低炭素化に貢献する新たな技術の導入等、環境保全に努めたいということで、先ほどから出ています気候変動対策を通じて、大会の発信力、札幌でこういうことをやったということを発信することによって世界に貢献していきたいと考えてございます。

最後に、左のグラフでございますが、競技会場は92.3%を既存の競技会場を使うということで、一つの緑の部分は、既存の更新時期が来たので新しく建て替えます。具体的に言うと月寒体育館ですけれども、月寒体育館は、かれこれ五、六十年たって、老朽化が進んでいます。大会時には新旧の月寒体育館が同時に使われる形になりますけれども、既存施設の建替えが緑で1がついています。既存の改修工事なしというのが月寒体育館とご認識いただければと思います。

かなり駆け足でしたが、以上が大会概要の説明でございます。

最後の部分ですが、私たちは11月29日にこの案を公表しました。そして、これからがまさに我々の正念場でございます。市民の皆様はこの大会概要案、そして、札幌市の考え方を丁寧に説明していきたいと思っています。そのためには、ワークショップやシンポジウムを開催します。そして、呼んでいただければどこでも参るつもりでありますので、ぜひ、委員の皆様のお近くでオリンピック・パラリンピックの話を聞いてみたい、あるいは、札幌市にいろいろ質問したいという方がいらっしゃれば、場所があれば我々はどこでも参りますので、ぜひお声かけいただければと思います。最後にそういったお願いをさせていただきます。私の説明を終わります。

○黒田会長 では、ただいまの事務局からの報告について、ご意見、ご質問などはありませんか。

○川島委員 パラリンピックの関係ですけれども、冬期間、特に、降雪時は、車椅子の方々の移動は非常に厳しくなってくると思います。そのため、ここにも書いていますとおり、様々のところのバリアフリー化などを当然進めていかれるのでしょうか。現在、札幌市内のホテルでは、多くの車椅子の方々を受け入れるような設備、施設が整っていないと聞いていました。この辺に関しても、当然、対応されていくということなのでしょうか。

○事務局（須志田計画担当課長） 実は、その部分は、今、民間の方々の力を借りてというところがございます。例えば、札幌市のほうからそういった部分にしっかり対応してくださいといっても、やはり一定程度のコストがかかります。やってくれる方はもちろんいらっしゃるのですけれども、オリンピック・パラリンピックが開催されますという共通の目標を掲げることによって、確実に促進される方向に行くと思います。

それも、東京大会のアクセシビリティガイドラインなどを参考にしながら、民間のホテルのバリアフリー化は非常に課題となっておりますが、それを大きく進めるためにも、オリパラの開催は非常に資するものであると認識してございます。

○黒田会長 そのほか、いかがでしょうか。

○浅香委員 私は、最初の26年を目指していたときの招致委員会に委員として入らせていただいていた。障がい者スポーツについて仰せつかっていながら、障がい者に関することを、今、川島委員に言っていたように、私はそういう質問を一切しなかったのですけれども、例えば、オリンピックの前は、大倉山ジャンプ台と宮の森ジャンプ台が2本並んでいたのを戻したらどうですかという意見を言ったら、あなたはばかではないか

という感覚で、日の丸飛行隊の遺言はどうなるのだ、それこそレガシーは消えてしまうような話をされて、二度もなく却下されました。

阿部委員に伺いますが、クロスカントリーの世界選手権を白旗山でやったときなどは、お客さんはどのくらい来るものなのですか。

○阿部委員 今、クロスカントリーの大会をやってもあまり人が集まらないですけれども、僕たちがメダルを獲って帰ってきて、ワールドカップを開催したときには、7,000人とか8,000人が白旗山に集まって、本当に身動きできないくらい人が来たときもありました。そのときにスター選手がいたら、多分、会場には皆さん来てくれると思います。

○浅香委員 昨日、一昨日と、パリ五輪の開会式で、選手団を船に乗せてセーヌ川を6キロ渡るといような報道がされています。これは素人考えですけれども、札幌競馬場と北大を使ってクロスカントリー競技を何とかできないものかと考えています。そうしたら、ほぼ暖かいところで、交通の便がよくて、あそこに雪の山を作ったり、どこかの道路に橋を1本ぐらいつければ数千万円ぐらいで済むのかなと思っていました。

やはり、たくさんの人に見てもらおうということが大事かと思っていまして、2020でも、強引だったのか、国の命令だったのか知らないですけれども、マラソンコースで北大構内を走りましたね。ですから、もし可能であれば、少し変わった発想をしたほうが楽しめるのかなと思ったところです。

○阿部委員 その点に関しては、いろいろな案がありまして、競馬場も一つの案で、僕も見に行ったことがあります。

もう一つの案は、円山公園にある円山競技場と野球場の両方を行ったり来たりして、下にテニスコートがあるのですけれども、そこまで降りて行ってというコースも検討されたことがあります。ただ、それはレガシーとしてあまり残らないということと、経費も結構かかってしまうということがあります。ですから、一つの案として、宮の森のジャンプ台を移設した場合に、そこを使ってという提案をしたことがあるのですけれども、やはり、いろいろ問題があって、ジャンプ台の近くにクロスカントリー競技場はできないという現状があって、今もいろいろな策を検討している最中です。

ワールドカップは、ルール上、ジャンプを飛び終わって1時間以内にクロスカントリーをスタートしなければいけないというものがあるので、白旗山まで行っていると間に合わないのです。そういうこともあって、まだその辺はクリアになっていない状態で、いまだに検討中です。

○黒田会長 そういうルール上の縛りもかなりあるのですね。初めて知りました。

私から1点ですが、観光客の人数の見込みはもう出されていますか。

○事務局（須志田計画担当課長） 今、試算中のございまして、東京大会を例に取りますと、開催までの直接効果が5兆円で試算されておりまして、レガシー効果、大会後にロコミとかメディアに報道されたことで、観光客とか世界から皆さんが押し寄せることによる効果を27兆円と試算されています。

我々も、今、直接効果としては数千億円という規模で一旦試算していますが、実は、レガシー効果、大会後の効果は産業構造に依存したりしますので、計算にかなり時間がかかります。ですから、あくまで試算でございますが、大会後にはこれぐらいの感じで観光客が増えていくのではなかろうか、そういったものは将来的にしっかりお示ししていきたいと思っています。

○黒田会長 学会でも、ふだんは行かないような札幌か沖縄でやると、めちゃくちゃ来るのです。ですから、日本国内で札幌か沖縄となると、国内の移動もかなり頻繁になるのかなと想像したので、すごい人になるだろうと思っていました。

例えば、東京オリンピックでもありましたように、子どもたちが見るような機会はあったりするのですか。

○事務局（須志田計画担当課長） そこは、組織委員会が立ち上がってから具体的な話になっていくのですが、今回、コロナのためにパラスポーツを小学生が見る機会がなかったという場面は報道でも多く見ました。私たちの思いとしては、できるだけ多くの小学生の皆さんに会場に足を運んでいただく機会を、特にパラスポーツなどを見ていただくような場面をぜひつくっていききたいと、これは私たちの思いですけれども、そのように考えています。

○堀田委員 100年後も輝き続ける札幌市にするために、今のスポーツ推進もそうですが、私ども、つい昨日、商工会議所から、オリパラを応援していく招致のチラシを早く配って、今月中に人数を募集してくださいと送るのですけれども、一市民としても、とても大事な応援の仕方、そして、周りの人を誘っていくという力、やっといこうとする一人一人の力は大事かと思いますので、そういう面で貢献できるところは微力ながらやっといこうとしています。

○阿部委員 これは参考までにですけれども、コロナになってから、逆にいろいろなことが進歩して、例えば、会議にアバターの人が参加するとか、そういうことがどんどん進んできて、2030年という9年後なので、もしかしたら、チケット代を払うと、会場の中にいるようなところで見られるとか、観客席を増設しなくても、そういうものでお金を得ることができたり、ITによっていろいろな可能性があるかもしれないという話をいろいろなところから聞いています。

私はeスポーツ協会の会長もやっていますが、eスポーツのほうでもITはかなり進んでいて、日本はちょっと遅れている感じがしますが、もしかしたら、もっとお金をかけないで大会ができる可能性もあるのではないかと感じています。

○黒田会長 今回、大会がもたらすまちの未来ということで、スポーツ・健康、社会、経済・まちづくり、環境という四つを掲げて、いろいろテーマがありますが、その中で意見や要望はありませんか。いかがでしょうか。

○川口委員 私は学生時代に、前の札幌冬季オリンピックのときにアイスアリーナのほうで携わった経験がありまして、今回、また新たにという部分で、やはり、使った後の継続、

レガシーということでお話しされていますが、やはり、建て替えるにしても何にしても、専門家によって、これからまた新しい補強なりをしようと思うのですけれども、継続して100年ということですから、これから長持ちする建物を造っていただけるかということも私たちにとっては大切だと思っていますので、そこを重視していただければと思っています。

○後藤委員 言葉が非常にすばらしくて聞き入ってしまいましたが、この大会ビジョンの札幌らしい持続可能なオリンピック・パラリンピックとありますが、札幌らしいというのはどんなイメージなのか分からなくて、ずっと悩んでいました。

また、レガシーを引き継いでいくということなのですが、今、川口委員から建物のことをお話しされたのですが、私は、そうではなくて、心のバリアフリーとか、ボランティアとか、ジュニアや高齢者のスポーツ選手や運動する方をどうやって長続きさせるかとか、そういったソフト的なものをしっかりやることで、それがずっと何世代も引き継がれていくのではないかと思うのです。やはり、建物は老朽化して壊されますので、それはなかなか難しいことだと思っています。

東京オリンピックも、コロナ禍で行われましたが、すばらしい大会だったと思います。そこで得たものは、僕の感じとしては頑張ろうという気持ちだと思うのです。いろいろな意見がありましたが、成功させようという気持ちですね。ソフトといいますか、育成とか、ずっと使っていけるようなものが大事なのかなと思いました。

最後に、2030年の頃には今のコロナがどうなっているかは分かりません。また新しい感染症があるかもしれません、何か起きたときに、東京オリンピックのときのように対応を考えての大会運営費なのか、施設の配備なのか、会場の状況なのか、そういうことを考えていただいて、想定外だったということのないようにしていただきたいと一市民として思いました。

○事務局（須志田計画担当課長） まず最初の札幌らしいというのは、人によっていろいろな捉え方があると思うのですが、今、私たちがこの計画をつくりながら考えていたのは、札幌市民というのは、やはり札幌市が好きで、札幌市に住み続けたいのです。魅力度ランキングとかいろいろありますけれども、全国から見ても、先ほど黒田会長からも沖縄と札幌で学会があれば人が集まるというお話もありましたように、人を引きつける魅力があり、住んでいる人もこのまちに住み続けたいと思っている。そして、ここはほかから見て憧れのまちであり続けるというのが札幌らしさの一つであって、そこには、例えば、ウィンタースポーツがあって、食があって、文化があって、観光があって、美しいまち並みがあって、いろいろあると思うのですけれども、札幌市民が好きな札幌市であり続けたいという思いがございます。

また、感染症の対策ですが、実は、予備費として200億円を持っています。この前、新聞発表がございましたが、コロナによって警備にかかる予算を削減できたので、無観客でやったことよっての赤字額はそれほどなくて、逆に余剰金が少し出たという話がござ

います。ですから、200億円をもって、さらに、今、見込んでいる経費ですね。警備などの人件費などをカットすることによって、それほど赤字にはならないような運営ができるという見込みで、今、200億円を積んでいるところでございます。

ですから、当然、国などの力を借りながらですけれども、一定程度、そういった形でできるかなと思っています。

○黒田会長 そのほか、いかがでしょうか。

○事務局（小泉招致推進部長） 招致推進部長の小泉でございます。

本日は、どうもありがとうございました。

去年の1月に、私ども札幌市がJOCから国内候補地に選定されて、さあ行くぞといった段階でコロナの感染状況が悪化しまして、表立った活動はなかなかできていない状況でしたが、IOCとかJOCとは定期的に打合せ等々を進めてきています。

今回の計画も、IOCの考え方をかなり取り入れた内容になっていまして、例えば、既存施設を九十何%というのは、最近だと100%にしろという話もあるのですが、それはなかなか厳しいというお話をしつつ、そういうようなイメージで計画を取りまとめてきています。

また、この案を発表したのが11月29日だったのですが、その前に内容が外に漏れてしまった部分もありまして、かなり報道されていまして、いろいろな書かれ方があります。いいように書いていただいているところもありますが、なかなか厳しいご意見もあります。

今日の午前中に市長会議がありまして、そこで市長は、やはり経費面での考え方が正しく伝わっていないのではないかというお話をしていました。要は、先ほど須志田からも話をしましたけれども、3,000億円かかります、それがほかに使えるのではないかという話なのですが、そのうちの約2,000億円から2,200億円というのは民間の資金で、なおかつ、それが札幌に集まってくるということで、それに対する経済波及効果はかなり大きいものがあって、実質、札幌市の負担額は450億円であると。そういう正しい内容が伝わっていないということもありますので、今後、それをしっかり伝えていきたいと考えています。

そこで、今、我々が1月以降に考えているのは、小学生向けのオンラインを使ったワークショップとか中高生向けのワークショップ、また、一般の方も3回ぐらいでワークショップを予定していまして、コロナの感染状況もありますけれども、1回は対面でやればいいかなと思っています。市長もできるだけ参加したいという話もしていますので、これから告知されると思いますので、チャンスがあれば来ていただければと思っています。

また、別に大学生関係もいろいろできる方法がないとか、先ほど話しましたけれども、出前講座も積極的にやって、我々の考え方を正しく伝えていくことが市民支持率に直結するのかなと思っていますので、何か機会がありましたら、皆さんもご協力とか周知をしていただければとてもうれしいなと思います。

本日は、どうもありがとうございます。

○後藤委員 私の妻が女性アスリートのフォローをされていて、特にジュニア、シニア、大学生の野球肘などを見ているのですが、野球肘で肘がもう使えなくなっている選手を結構見えています。

そのジュニアの育成に関して、僕は現場は全く分からないのですが、技術的な面の指導もすごく進んでいると思うのですが、例えば、けがの予防だったり、メンタル的なものだったり、そういったものをフォローするということは統合的に何かやっていたらいいのでしょうか。

例えば、野球なら野球、スキーならスキーとなってしまうのかもしれませんが、何かあるのでしょうか。

○黒田会長 それは、今回のオリンピックとは別ですね。

○後藤委員 やはり、スポーツは、けがとかメンタル的なことも非常にあって、時々、女性アスリートの方で、成績を上げるために食事を制限したり、体重を管理したり、そのことによって鬱になってしまう方もいらっしゃいます。

ですから、そういったフォローについても、オリンピックを考えるに当たっては大事なことだし、それ以降もこういったことは続けていく必要があるのではないかと思います。札幌市とか北海道ではどのように進んでいるのかと思って、提言させていただきました。

○黒田会長 オリンピックを誘致する上で、そういった教育をしているかということですか。

○後藤委員 そういうのもあれば、なおいいのかなということです。

○事務局（小泉招致推進部長） 現時点で何かやっているかといったら、まだそこまではできていません。今後、組織委員会等ができましたら、そういう対応等を行っていく必要があると思っています。

先ほど、4分野でレガシーというものを一例で全部出していますが、今でもそうだと思うのですが、将来的にはいろいろなレガシーがあると思うのです。それに向けて、皆さんの力や工夫を取り入れて進んでいくのがオリンピック・パラリンピックの力だと思いますし、私どもの市長がよく言うには、具体的に参加できるプログラムをできるだけつくっていくことが必要かなという話もされているので、そういうことに向けて我々も取り組んでいきたいと、今のお話を聞きまして、すごく感じていました。

○黒田会長 それでは、議事は以上としまして、事務局から何かございますか。

○事務局（深井企画事業課長） 改めまして、貴重なご意見をありがとうございました。

今後のスポーツ行政に生かしていまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○黒田会長 それでは、本日予定していました議題は全部終わりましたが、最後にお伝えしたいことがございましたら、お願いします。

(「なし」と発言する者あり)

３．閉　　会

○黒田会長　ないようでしたら、これをもちまして、第２８期第３回札幌市スポーツ推進審議会を終了させていただきます。

委員の皆様、ありがとうございました。